

ジョゼフ・ド・メーストルによる翻訳実践の検討

プルタルコス『神罰が遅れて下されることについて』翻訳について

加藤 一輝

はじめに

ジョゼフ・ド・メーストル（1753-1821）が、晩年に執筆を続けた未完の大著『サンクトペテルブルク夜話』（初稿 1809 年、没後刊行）で、とくにその末尾において、世界の再統合を翻訳に期待しようとしていることを、先に拙論で述べた¹。また、余談の尽きない鼎談集ではあるが、そのきっかけであり全話に亘って続いている主題は、冒頭でネヴァ川の夕暮れを眺めながら士爵の投げかけた、どうして悪人が現世で神罰を受けずに幸せにしているのか²、という疑問であったことも、同論で触れた。

本論では、やはり晩年に著された、メーストルによるプルタルコス『神罰が遅れて下されることについて』の翻訳（公刊 1816 年）を検討する。この作品は、もとよりプルタルコスの著作であって、基本的には原文どおり訳されている。すぐあとに見るように、訳者メーストルによる加筆も散見されるものの、大意は原文に即しており、いわゆる「超訳」「創造的誤訳」の類ではない。そのためか、これまでメーストル研究において焦点を当てて論じられていないようである。しかし、メーストル自身の翻訳観を実践で示すのみならず、「神罰が遅れて下される」理由を考えるにあたってプルタルコスを参照していることも、序文を附して古代ギリシャ語から現代フランス語へと翻訳する意義と手法を自ら説明していることも、メーストルの思想において重要な点であるから、本論では翻訳の形式と内容の双方について分析を試みる。具体的には、1. 訳者序文で述べられる翻訳動機と指針、2. 形式面での改変、3. 内容面での加筆、4. メーストルの言語観、の順に見てゆく。

¹ 加藤一輝「バベルとペンテコステ：メーストル『聖ペテルブルク夜話』の世界観」、『仏語仏文学研究』第 51 号、東京大学仏語仏文学研究会、2018 年、65-85 頁。

² メーストルには、新刊で入手できる批評校訂版選集 *Joseph de Maistre : Œuvres*, Pierre Glaudes (dir.), Paris, Robert Laffont, 2007 と、オンラインで参照可能な 19 世紀の全集 *Œuvres complètes de Joseph de Maistre*, Lyon, Vitté et Perrussel, 1884-1886, 14 vol. がある。本論では、どちらにも収録されている作品については双方の出典を選集；全集の順で JM；OC と記す。たとえばこの士爵の台詞は *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 457-458；OC t. 4, p. 6-7. 以後、メーストルの作品は著者名を省略する。

1. 翻訳動機と指針：メーストルのプルタルコス受容

まずは、メーストルが訳者序文で述べている、この作品を選んだ理由と翻訳にあたって採ろうとする方法について確認しよう。ただし、本論に限らず一般的にいつて、翻訳の検討とは原典からの逸脱の検討となろうが、原典の全体像を踏まえなければ逸脱の検討もしようがないので、先にプルタルコスによる原典のほうを簡単に紹介する。なお、本論の筆者はプルタルコスおよび古代哲学の専門家ではないため、既刊の日本語訳に全面的に依拠しており³、筆者の加えうる知見はないことを、あらかじめお断りしておく。

プルタルコス『神罰が遅れて下されることについて⁴』は、「わたし」＝プルタルコスと、パトロクレアス、ティモン、オリュンピコスの4人による対話篇で、3人の投げかける問いにプルタルコスが答える形で議論が進められる。全体を貫く主題は、パトロクレアスの提示した「悪人たちに対するダイモーンの懲罰の遅れと、その意図⁵」についてである。それに対してプルタルコスは、神やダイモンについて人間が完全に理解できるわけではないが、神罰は報復ではなく治療を意図しているから、悪人に改心のための時間的猶予を与えているのだ、と答える。するとティモンが、罪に対する罰が行為の当事者ではなく別の者に下されるのは何故か、つまり自ら罪を犯したのではない後世の子孫や同国人が罰を受ける不条理について問う。プルタルコスは、国家や氏族は連続したひとつのものだからだ、と答える。続けてオリュンピコスが、来世での罰について、すなわち肉体が減じたあとも魂は不滅なのかと問うと、プルタルコスは、神託が死者への償いを命じることがあるように、魂の持続は神の摂理に等しい、と答える。そのあとプルタルコスは、放蕩三昧の男テスペシオスが死後の世界で懲罰を受ける魂たちの様子を見、改心して実直な人間となって甦った、という逸話を語る。

ティモンによる問いは、メーストルが『フランスについての考察』第3章で提示し、『サントペテルブルク夜話』第9話で自己引用している「罪人

³ プルタルコス「神罰が遅れて下されることについて」『モラリア 7』田中龍山訳、京都大学学術出版会、2008年、94-165頁、および訳者による「解説」、同書351-358頁。

⁴ Πλούταρχος (Plutarchus), «Περὶ τῶν ὑπὸ τοῦ θεοῦ βραδέως τιμωρουμένων (De sera numinis vindicta)», *Ηθικά (Moralia)*, 548a-568a. 以下『モラリア』とする。

⁵ 『モラリア』548c-d. なお、ギリシャ語にいうダイモンとは、唯一神的な意味での神(テオス)ではなく、超自然的な力あるいは神と人間との間に立つ二次的存在のことで、必ずしも「神 Dieu」と同一視はできないが、アミヨもメーストルも「ダイモーンの懲罰」を«la justice divine»と仏訳している。

のための無辜の者による苦しみの可換性⁶」と、まさしく同じである。古代哲学とキリスト教神学を重ね合わせる見方はメーストルに始まるものではないが、メーストルはプルタルコス の 撰 理 論 を そ の 一 例 と 看 做 し て い る。

メーストルの『モラリア』とのつきあいは長い。革命前の 1782 年には既に『ブラウンシュヴァイク公に宛てた覚書 *Mémoire au duc de Brunswick*⁷』で「イシスとオシリスについて」に言及している。革命後も、1794 年の『主権原論 *Étude sur la souveraineté*』では「デルフォイの E について」を参照している。『サンクトペテルブルク夜話』では、第 4 話の自註で『神罰が遅れて下されることについて』に依拠して「人間が最も甘美に神を享受できる方法とは、神の完全性を模倣して自己を可能な限り神に似せることに他ならない⁸」と書き、第 9 話では伯爵の「人間を行動でしか見ない者は、人間が罪を犯したのを見たときのみ悪人だと言うでしょう。しかしそれは、毒蛇の毒は噛みつくときにのみ生まれていると思うのと同じです。状況は、悪人を作るのではなく、悪人を明らかにするのです⁹」という台詞に『神罰が遅れて下されることについて』の論理を借りていると自註をつけている。こうした長年の私淑を経て、晩年の翻訳に至ったのだ。

翻訳の検討に移ろう。メーストル全集の第 5 巻に収録されている *Sur les délais de la justice divine*¹⁰ は、本文（訳文）全 71 ページに対して、序文 12 ページ、後註 25 ページと、前後にメーストル自身の文章が多く加えられている。序文の冒頭では、翻訳を試みるに至った理由が、こう語られている。

わたしは当初、プルタルコスの〈論考〉『神罰が遅れて下されることについて』について、高名なメンデルスゾーンがプラトン『パイドン』について行なったような著作を構想していた。つまり、古代の作品を単に粹として用い、プルタルコスの考えを非常に従属的な位置に置いて、この〈論考〉で扱われてい

⁶ *Considérations sur la France*, JM p. 218 ; OC t. 1, p. 38. *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 708 ; OC t. 5, p. 122. 傍点は原文イタリック、以下同様。

⁷ Ferdinand, duc de Brunswick-Lunebourg (1721-1792) のこと。

⁸ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p. 572 ; OC t. 4, p. 240. 『モラリア』550d に当たる箇所。なおプルタルコスはこの主張を「プラトンによると」としている。

⁹ *Ibid.*, JM p. 713 ; OC t. 5, p. 130-131. 『モラリア』562c に当たる箇所。

¹⁰ OC t. 5, p. 361-470. 批評校訂版選集には収録されていない。以後、*Sur les délais de la justice divine* からの引用は作品名を省略する。なおメーストルによる仏題を直訳すれば『神の正義の遅れについて』であり、「(神) 罰」という表現はない。

る興味深い主題について、学識を深めた形而上学によって後世のわれわれにもたらされた考えと、いわば混ぜ合わせてしまうつもりだった¹¹。

ところが、注意深く再読するうちに、プルタルコスの原典には改変の余地がない、「彼の考えには些かの学派性も地域性もなく、あらゆる時代あらゆる人間に属するものだ」と気づいたとして、「プルタルコスがキリスト教の真理について何らかの知識を持っていた」可能性を示唆し、実証的には不明であると留保しつつも、「プルタルコスの論考、『神罰が遅れて下されることについて』が、古代の最も優れた作品のひとつであることは確かだ」と結論づける¹²。

メーストルは、古典古代と初期キリスト教の照応を前提とし、原文に手を加える必要はないと最初に宣言しているのだ。比較研究という性質上、本論では原典との差異にばかり着目することとなるが、全体的には原文に即しており、作中で挙げられる古代の逸話のやや煩雑な固有名詞も省略せずに訳出されている。そして、プルタルコスの著作が現代でもそのまま通用するのはキリスト教と同じ真理を語っているからだ、という評価は、『サンクトペテルブルク夜話』第10話において「一見したときに、不幸の世襲ほど衝撃的なものはない」にもかかわらず「幸福や不幸の世襲は、あらゆる時代あらゆる国にあるものです。ユダヤ教やキリスト教と同じく異教にもあります。古い国と同じく世界の揺籃期にもあります。神学者にも哲学者にも詩人にも、劇場にも教会にもあるのです」と語っていたような¹³、あらゆる宗教や共同体に一致して見られる原理だから真実なのだ、という部類の護教論と同じ論理である。十分な普遍性を持っているのだから、現代の言葉で読めるよう直訳すれば、それで足りるのだ。

メーストル以前に『神罰が遅れて下されることについて』の仏訳がなかったわけではない。というより、メーストルは当然ジャック・アミヨの翻訳を参照している。

わたしは先行する翻訳者たちを大いに尊敬している。とくにアミヨは間違いなくフランス語に貢献し、彼の古い文体は今でも新鮮な魅力を持っている。しかし、彼の年を重ねた若々しさを好むのが、彼の言葉づかいに極めて精通した文

¹¹ *Ibid.*, p. 363. 〈 〉は原文で頭文字が大文字の単語、以下同様。

¹² *Ibid.*, p. 364, p. 366, p. 370. なお、この部分でメーストルは、ウィッテンバッハがキリスト教のプルタルコスへの影響はないと断じていることに反論しているので、ウィッテンバッハによるラテン語訳を参照していることも分かる。

¹³ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 730 ; OC t. 5, p. 165.

人だけであることは、認めねばならない。この集団の外では、彼は読まれるというより尊敬されている。彼の綴りは目を混乱させる。彼の韻は耳に障る。とくに女性、それから外国人には、あまり好まれない¹⁴。

わざわざ撞着語法の部分をイタリックで強調しているのがメーストルらしいが¹⁵、すでに 2 世紀以上も前のフランス語ゆえに文体のせいで専門家にしか読まれなくなっているのは勿体ない、「文人 *gens de lettres*」とは程遠い（とメーストルの考える）「女性 *dames*」や「外国人 *étrangers*」のようなひとたちにも読んでほしい、というのが、新訳を試みた理由なのだ。逆に言えば、言葉づかいを現代風にすればプルタルコスの議論は誰にでも理解できる、翻訳によって古典は万人に開かれる、とメーストルは考えているのである¹⁶。

2. 形式面での改変

プルタルコスによる古代の著作が、そのまま 19 世紀の現在にも通用すると考えたメーストルは、なるべく原典に忠実な翻訳を心掛ける。それを読者にも分かってもらえるよう、手を加えた箇所は明示したと序文で述べている。

まず、わたしはアミヨの翻訳にある章の順序に正確に従った。だから比較するのは全く難しくないだろう。どこがどちらに属するのか知りたい読者が、いちいち検証する煩わしさを避けるため、プルタルコスによるものでない部分は全てふたつのアスタリスクで挟むようにし、そうした原文にない箇所にも原著の語句を盛り込めるとき（なるべくそうするよう心掛けた）はイタリックにした。したがって、読者は誰でも各行ごとに識別できるようになっており、さらに、わたしが原著者に属するものの一切を読者に隠さぬよう細心の注意を払ったと信じられるはずだ。2、3 の、非常に短かく、全く本質的でなく、また内容は保たれている章と、われわれの考えとは未だ完全に無関係な幾つかの部分を除いて、わたしはプルタルコスから一行たりとも削るのを自らに許さなかった。そ

¹⁴ OC t. 5, p. 371.

¹⁵ アントワーズ・コンパニオンはメーストルの文体的特徴として撞着語法を挙げ、それはメーストルの扱う主題が逆説的だからだと述べているが（Antoine Compagnon, « Oxymoron et antimétabole », *Les Antimodernes*, Gallimard, 2005, p. 143-146）、アミヨの翻訳に大して逆説的な要素はなく、現代にも通ずる古典といった程度のことを言うのに撞着語法を使ってイタリックで強調するのは、単に言葉遊びが好きなのではないとも思われる。

¹⁶ もっとも、19 世紀以降『神罰が遅れて下されることについて』の仏訳はメーストルによるものが普及してゆくが、たいていアミヨの仏訳と合本で出版されているから、メーストルの認めるとおりアミヨの文体にも依然として魅力があると思われるのだろう。

して、さまざまな関連性から有用と思われる註を作品に附し、その多くは過度にページを塞がないよう巻末に回した¹⁷。

16 世紀のアミヨの翻訳では章分けは全く行なわれていないから¹⁸、メーストルがアミヨの何を参考にしたと言っているのかは定かでない。当時の普及版には章分けを施したものがあったのだろうか。出典を小まめに記すメーストルだが、アミヨのどの版を読んだのかは書かれていない。それはともかく、章分けについては納得しやすいだろう。古典作品の翻訳で、内容に応じて訳者が章分けや改行を加えて読みやすくしているものは珍しくない。メーストルの翻訳は全 51 章に分けられており、章題はなくローマ数字のみが附されている。全て 1 段落ずつなので段落分けと言ってもよい。第 XLII 章の途中に「テスペシオスの逸話」という見出しが入るが、そのあとも章分けは連番で続く。この「テスペシオスの逸話」以降には、アスタリスクで挟まれた訳者加筆は全く見られない。

注目すべきは、対話形式の排除である。確かに『モラリア』において対話形式で書かれている作品は珍しい。たとえばヒュームは¹⁹、同じく対話形式で書かれた『神託の衰微について²⁰』と並べて、『神罰が遅れて下されることについて』を「対話形式で書かれ、迷信的で荒唐無稽な幻想を含み、主にプラトン、とくに最後の著書『共和国論』に対抗して書かれたと思われる²¹」として、内容もろとも低評価で切り捨てている。しかし『神罰が遅れて下されることについて』でブルタルコスの同伴者を務める 3 人は、けっして意地悪な質問をしているのではなく、対話形式ゆえに議論が追いにくなってい

¹⁷ OC t. 5, p. 373.

¹⁸ Plutarque, « Pourquoy la justice divine diffère la punition des maléfices », trad. Jacques Amyot, dans *Les Œuvres morales et meslées de Plutarque, traduites du grec en françois*, Imprimerie de M. de Vascosan, 1572, p. 258r-269v. なおアミヨによる仏題を直訳すれば『なぜ神の正義は崇りによる罰を先延ばしにするのか』であり、メーストルの簡素な仏題とは異なる。

¹⁹ メーストルのヒュームに対する評価は両義的である。『フランスについての考察』最終章である第 11 章すべて (JM p. 276-288 ; OC t. 1, p. 158-181) が『イングランド史』(自註によればバーゼルで刊行された英語版 David Hume, *History of England*, J. L. Legrand, 1789 を参照している) からの引用集によるフランス革命の説明となっているように、歴史家としては信頼している一方、『サンクトペテルブルク夜話』第 6 話 (JM p. 624-625 ; OC t. 4, p. 349) や第 8 話 (JM p. 693 ; OC t. 5, p. 91) では無神論的な態度を強く非難している。

²⁰ Πλούταρχος (Plutarchus), « Περὶ τῶν ἐκλελοιπότηων χρηστηρίων (De defectu oraculorum) », *Ἠθικά (Moralia)*, 409e-438d.

²¹ David Hume, « Of the Populousness of Ancient Nations » (1752), *Essays: Moral, Political, and Literary*, edited by Eugene F. Miller, Liberty Press, 1987, p. 463.

るとは思われない。もし質問が厳しく聞こえるとしたら、神罰が遅れて下されるという事態そのものが、人間にとっては不条理と映るからに他ならない。その説明に神や摂理を持ちだすのが、ヒュームには「迷信的で荒唐無稽な幻想」に見えて気に喰わなかったのだろう²²。

ところが、内容について完全に賛同しているメーストルもまた、対話形式は無用だとして、翻訳では全てを地の文に書き換えている。

わたしは、この〈論考〉ではほとんど注目に値せず、わたしを無駄に悩ませた〈対話〉形式を廃した、というのは、この形式は、ときには非常に優れているが、ここでは如何なる種類の美しさも実利も生んでいるように見えないからだ。また、これまで皆に信じられ、その点について充分な根拠のある疑問を投げかけたウィッテンバッハ氏までもが言うとおりの、この作品の導入部は消えていないのだとしたら、プルタルコスも、同時代のひとたちにとっては親切だったかもしれないが、少なくともわれわれにとっては親切でない唐突なやり方で始めたのだ。そこでわたしは、いつでもなるべく著者に寄り添いながらも、この美しい建物に入口を作り、自然なやり方で本題に入ろうとした²³。

『神罰が遅れて下されることについて』の冒頭は、エピクロス²⁴が何か言って去っていったので、それについて議論しよう、中でも最も重要なのは「悪人たちに対するダイモーンの懲罰の遅れと、その意図²⁵」についてだ、という始まり方をしている。ただしエピクロスの台詞は書かれておらず、「わたし」（＝プルタルコス）の台詞から「摂理に対して悪口を浴びせていった」と推測できるのみである²⁶。前の作品『妬まれずに自分をほめることについて²⁷』の続きでもないのに、本来あったはずの作品の途中から始まっているのではないかと考えても、おかしくはない。然るべき全体性、いわば目的論的秩序を持った形の作品とするには、翻訳に際して冒頭部分を「自然なやり方」での導入となるよう補完してもよからう。

²² なおメーストルは「テスピシオスの逸話」という表題に註をつけ、ヒュームはこの地獄めぐりの話が気に喰わなかったのだらうと述べている（OC t. 5, p. 464-465）。

²³ OC t. 5, p. 370.

²⁴ いわゆるエピクロス派の祖であるエピクロスは、プルタルコスの同時代人ではない。前掲の邦訳によれば、プルタルコスと同年代でエピクロスという人物は伝えられておらず、版によっては「エピクロス派の人」と読み替えている、という。メーストルも「エピクロス派 secte d'Épicure」と解釈したようだ。

²⁵ 註5 参照のこと。

²⁶ 『モラリア』548c.

²⁷ Πλούταρχος (Plutarchus), « Περὶ τοῦ ἑαυτὸν ἐπαινεῖν ἀνεπιφρόνως (De se ipsum citra invidiam laudando) », *Ηθικά (Moralia)*, 539f-547f.

しかしメーストルは、内容的には全く改変していないのだ。第Ⅰ章は冒頭と末尾にアスタリスクがついており、章全体が（アスタリスク内イタリックの部分を除いて）訳者の創作ということになっているが、原典でパトロクレアスとティモンの喋っている内容は、地の文に変えた上で、全て盛り込まれている。たとえば出だしはこうだ。

*エピクロス派の一般的な手口とは、〈摂理〉の擁護者に対して、きちんとした論争から逃げることだ。いつも異議を吹っ掛ける準備をしておきながら、この学派の哲学者たちは、辛抱強く答えを待とうとしない。パルティア人と同じように、逃げながら戦うのだ。さらに彼らは、真実の特性であり特徴である冷静さと厳粛さを欠いている。彼らの発言には、何か刺々しく怒りっぽいものが必ずついて回る。考えながら、あるいは考える代わりに、罵るのだ。そして絶えず〈摂理〉を否定というより糾弾しがっている²⁸。

原文に全くないのは「パルティア人と同じように、逃げながら戦う」という部分だけで、エピクロス派は自分の意見を言いつばなしで返事を聞く前に立ち去るとか、怒りや非難の口調で摂理を罵倒するとかいった記述は、順番を入れ替えているが原文にもある。

このあとイタリックで挿入されているブランダスの槍の逸話は、原文ではティモンの台詞にある。続けて以下の一節があって、第Ⅰ章は終わりである。

それに、われわれは自衛のための攻撃には興味がない、なぜなら、実のところこの完全に否定的な哲学は騒音を生むだけだからだ。あらゆる側面からの異議を集めて、ごた混ぜに提示するが、教義の総体や、文字どおり一連の推論さえ確立できない、というのも、秩序、全体、そして何より肯定は、真理にしか属さないからだ。逆に、誤謬は常に否定する。これが誤謬の性質の最も顕著な特徴である。否定を止めると、たちまち冷笑や侮辱をする。誤謬にとって〈摂理〉は憎むべき敵であり、排除したい敵である。ただ、先に述べたように、われわれの心に残るかもしれない僅かな印象さえも消し去るべく、それらの異議のうち尤もらしいものを見てみよう²⁹。*

不合理で間違った考えを投げつけてきた相手に復讐するつもりはなく、その考えをわれわれが捨てられれば充分だというのは、原文ではティモンの台詞にある。エピクロス派の話が雑多で無秩序な寄せ集めであることは、ティモンに対する「わたし」（＝プルタルコス）の応答にある。つまりメーストル

²⁸ OC t. 5, p. 375.

²⁹ *Ibid.*, p. 376.

は、原文をやや膨らませ、摂理の支配を認めないエピクロス派に論敵たる近代主義者を仮託しているくらいはあるものの、別々の登場人物が述べた内容を保持しながら違和感のないよう繋ぎかえて地の文にしているだけなのだ。第Ⅰ章に限らず、メーストルがアスタリスクでくくって訳者の創作としている箇所多くは、原文で別々の登場人物の台詞となっているものを、なるべく内容を保持しながら地の文にしているだけである。

すると対話という形式だけが問題だったのか。これは不可解である、なぜならメーストルは『サントペテルブルク夜話』を、まさしく3人の対話形式で書いているからだ。対話形式が「ときには非常に優れている」というのは、対話形式の古典作品を念頭に置いて留保をつけているだけでなく、『サントペテルブルク夜話』を対話形式の作品とせざるを得なかったことの表われである。

『サントペテルブルク夜話』は、実際に行なわれた対話が元になっているが、対話形式は本には向かないことを、第8話の冒頭で自己言及的に断っている。この晩、今までの会話を書き記しているから披露させてほしい、他2人にも同意してもらえれば印刷所を持って行くつもりだ、と切り出した伯爵を、伯爵は窘める。

伯爵：わたしの思い違いかも知れませんが、しかしそのような作品が上手く行くとは思えません。

士爵：どうしてですか？ つい先日あなたは仰ったではありませんか、会話は本よりも価値がある、と。

伯爵：確かに会話は学ぶのには役立ちます、中断や質問や説明ができるからです、しかしだからといって印刷されるにも向いているわけではないのです。

士爵：用語の混同はいけません。会話 *conversation* と対話 *dialogue* と鼎談 *entretien* は同義ではありません。〔中略：それぞれについて士爵が説明する。会話はとりとめがなく印刷には向かないが、3人で行なう鼎談はもっと思慮深いものだ。対話は架空の聞き役を使った創作である。〕わたしたちは、互いに学び合い、慰め合うために話しています。わたしたちの間に従属関係はありませんし、お二方はわたしより年齢も知識も上ですが、わたしがお願いしなくとも対等に扱ってくれます。ですから、わたしたちの鼎談が忠実に、つまり可能な限り正確に出版されたら……元老さん、どうして笑うのですか？

元老：お気づきでないようですが、あなた自身が、その計画に強く反対するような主張をされているように見えるからです。わたしたちが会話についての会話に入り込んでいる、これ以上はつきりとあなたの計画の難点を示すものがあるでしょうか？ まさかこの話を書き記したいとは思わないでしょう？

士爵：いや、断言しますが、本にするなら、この話を書き落とすはしませんよ。

それに、この話で気分を悪くするひとは誰もいないと信じています。実際の鼎談において余談は避けられませんが、それが本筋から出たもので、また無理矢理でもないならば、難点ではなく美点であろうと思います。どんな真実も、それだけでは自立できないでしょう。いわば他の真実に寄り添われている必要があります、そこから、どこで読んだか忘れましたが、きわめて正しい次の格言が導かれるのです、ひとつのことをよく知るには、千のことを多少は知らねばならない³⁰。

真実は単独では存在しない、必ず他の真実群とともに存在する、という考えはメーストル好みだが、ここでは伯爵ではなく士爵によって、しかも伯爵に反論して鼎談を本にすることを正当化する論理として述べられる。

『サンクトペテルブルク夜話』では、メーストルらしい思想が、メーストル自身であるところの伯爵ではなく、話し相手である士爵や元老によって、しかも伯爵に対する反論に用いられるという奇妙な場面が散見される。その最たるものが第 11 話だ。ヘレニズム時代に旧約聖書をヘブライ語からギリシヤ語へと翻訳した 70 人訳聖書がキリスト教をもたらしたように、現在プロテスタントの聖書協会によって行なわれている聖書の翻訳が未来の普遍性を準備する、という夢想を述べるのは、伯爵ではなく元老であり、その意見に伯爵は完全には同意しない。

『神罰が遅れて下されることについて』の翻訳で、内容を損なわないよう腐心しながら対話形式を解体し、ひとつの美しい建物となるよう多大な手間をかけて再構成していることは、むしろ『サンクトペテルブルク夜話』の形式の特殊性を明らかにしている。秩序、構成、一体性といったものを重視するメーストルをもってしても、ひとつの論考として統合できない迷いから、鼎談形式のままに留めてあるのだ。

3. 内容面での加筆

対話形式を廃するための改変は、原文に大きく手を加えているものの、内容としては意外なほどに原文を保持していることを確認した。ところが、形式変更に要請される修正ではない部分でも、加筆を行なっている箇所がある。確かにメーストルは序文で、プルタルコスを考えが「不完全」に見えることもあると述べる。

³⁰ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 686-687 ; OC t. 5, p. 77-80.

作品の流れの中で、彼の考えがわたしにとって不完全に見えたときは、わたしがそれを完結させてもよからう、そして何箇所かは、わたし自身の思索や、モンテーニュが別の作家〔原註：ルカヌス〕について述べた言葉を借りれば、わたしが好み、喜んで愛読しているプラトンの読解から新たに得た知見によって補強してもよからうと考えた。もし途中で、いわば潜在的なままに留まっている考えに出会ったら、わたしはそれを慎重に展開する。わたしがつぼみを開花させるのだ。葉は一枚も加えないが、全ての葉を見せる³¹。

あえて訳文の中に加えられた箇所は、プルタルコスに内在するものと説明しているが、実際にはどうなっているか。訳者による加筆のうち、メーストル独自の考察と思われるものを拾い上げてみよう。

プルタルコスは、なぜ人間が悪を為すかについては書いておらず、不正の甘美さに誘われて罪を犯したあとで良心の呵責に苦しむと述べている。しかしメーストルは、第 XX 章の末尾にある以下の加筆で、人間のうちに悪への性向があるとする。

善人にとって、美德のために大きな犠牲を払ったり、自分の最も大切に最も魅惑的な性向を克服したりするのは、大変である。しかし彼が最終的に自分自身の主人となったあかつきには、心中にほとばしる神聖な喜びによって報われる。悪人には正反対のことが起こる。罪は彼の目に最も魅惑的な色で映る。しかし、それを楽しむや否や、偽りの魅力は消えて、恐ろしい苦しみだけが残る^{32}。

悪人が罪の甘美さに魅せられるという記述は原典にも類似の表現を見つけれられるが³³、善人についての記述は見当たらない。プルタルコスは、人間は本来的に美德を備えており、外部から悪影響を受けたときのみ悪徳を開花させてしまうと考えているが、メーストルは、本質的な善人はおらず、人間は悪への性向を持っていて、それを抑えられるのが善人だと考えている。つまり完全に正しい人間なるものの存在を想定していないのだ。

本来的に不完全であるのは、個々人の人間のみならず、人間の作る制度についても同様である。第 V 章の冒頭で、人間の制定した法にはおかしいことを命じるものもあるという箇所³⁴に、以下のような挿入がある。

³¹ OC t. 5, p. 370-371. モンテーニュの言葉は『エセー』第 2 巻第 10 章「書物について」にある。

³² OC t. 5, p. 399.

³³ 『モラリア』554e-f に当たる箇所。

³⁴ 『モラリア』550b に当たる箇所。

人間によって作られた法律、*したがって必然的にわれわれの物事の見方に一致している、*は一見すると常に合理的であるとは限らない³⁵。

プルタルコス原文出处は、ある種の法が一見すると不合理に見えるのは立法者の意図が分からなくなっているからである、人間の立法意図すら分からなくなることがあるので、さらに上位にある神の正義について理解できないことがあっても当然だろう、という趣旨である。今では不合理に見える法律も、立法当時には然るべき理由があったはずで、それが忘れられただけなのだ、という単純な主張である。メーストルのように、人間による立法は理性の限界に縛られており、したがって法律は全て不完全なものだ、という意味ではない。

メーストルは、たとえば『フランスについての考察』第7章で、革命期の法律の濫立を「人間による立法が行なわれるほど、それはより人間的な、つまりは脆いものになる」「どうしてたくさん法律ができるのか？ 立法者がいないからだ」と評するように³⁶、革命後は一貫して人間による立法の愚かさを訴えてきた。それゆえ「人間によって作られた法則は、一見すると常に合理的であるとは限らない」という記述に乗じて加えたのだろう。さらに言えば、この不完全性こそが、それとは逆方向の、秩序をもたらす摂理の力を呼びこむというのが、メーストルの考える反革命である。もちろんプルタルコスの考えではない。

同様の理由によると思われる加筆が、もう一箇所ある。プルタルコスが具体例として挙げている逸話は当然すべて古代のものだが、国や時代を越えた摂理の原理が問題であるから、メーストルは何も足したり引いたりしていない。しかし一箇所だけ、第XV章で、ダイモーンによって他の悪人を懲らしめるために使われ、のちに当人が痛めつけられる悪人がいる、多くの僭主は民衆を浄化するために使われたのだ、という箇所³⁷に続けて挿入される以下の一節は、翻訳当時の状況への言及と思われる。

*なぜなら、国家が全体的な罰を被らざるを得ないほど罪深くなったとき、神が罰によって、つまり国家を辱め、絶滅させ、王位を転覆させ、王笏を移させて国家に秩序を取り戻させようと決意したとき、こうした恐ろしい報復を実行するために、ほとんどの場合、神は、あらゆる法を無視する大罪人、暴君、篡奪

³⁵ OC t. 5, p. 381.

³⁶ *Considérations sur la France*, JM p. 236-237 ; OC t. 1, p. 76, p. 78.

³⁷ 『モラリア』552f-553aに当たる箇所。

者、残忍な征服者を用いるからだ。彼らは神の裁きの執行者であるから、誰も彼らに抵抗できない。しかし、人間の無知は彼らの成功を称えるが、裁きが終わるとたちまち彼らが死刑執行人のように消え去るのが見られる³⁸。*

固有名詞は書かれていないが、同時期の書簡を見れば、「人類に対する残忍な敵」であり「ひたすらに大逆罪の罪人」であるナポレオンが、百日天下ののち流刑となったことを指していると分かる。メーストルは書簡で、ナポレオンがヨーロッパじゅうを蹂躪した末に失脚したのを、「あらゆる出来事において、目に見えぬ正義の正確さに感嘆せずにはおれません」と評しているからだ³⁹。ここには、メーストルが革命に見て取った、人間の愚かな行動による惨禍こそが神の裁きとして働いて贖罪となる、という歴史観が表われている。

ほかにもアスタリスクでくくられた箇所はたくさんあるが、先に述べたように会話を地の文にするためのものか、古代の人物を現代の読者向けに補足説明するためのものと看做してよいだろう。最後にもうひとつだけ、『サンクトペテルブルク夜話』との関連で興味深い一節を挙げる。第XXI章の、罪人は、罪を犯すときこそ大胆だが、たちまち恐怖や不安に苛まれるようになる、という箇所⁴⁰に続く加筆である。

千もの不吉な幻影が罪人の想像に現われる。絶えず逃げてゆき、絶えず戻ってくる。とりわけ夜は罪人にとって恐ろしい、安らかな眠りは美德によってのみ得られるからだ。罪が、罪そのものとともに生きることを余儀なくされ、あるがままの姿を見つめ、いわば触れ、そして恐怖を感じるのは、夜である⁴¹。

原文には夜についての言及は全くない。罪人に不安や恐怖をもたらすものとして、白昼夢や神託や落雷と並べて夢が挙げられているだけである。『サンクトペテルブルク夜話』第7話の末尾での、夜は魅惑的だが危険であり悪徳を助長するという元老と、夜こそ神聖なものと交信できる時間であるという伯爵との議論⁴²を思い出させる。両者は意見の一致を見ぬまま、夜が深まっ

³⁸ OC t. 5, p. 391.

³⁹ « À M. le Comte de Vallaise, Saint-Petersbourg, 27 juillet (8 août) 1815 », OC t. 13, p. 111.

⁴⁰ 『モラリア』554f-555aに当たる箇所。このあと、その不安や恐怖こそが罰となるので、罪悪感を覚える時間を与えるために神罰は延期されるのだ、と展開する。

⁴¹ OC t. 5, p. 399. ここにメーストルは註をつけて「睡眠はあらゆる労苦や心配からの避難所に見えるが、実際には不安や恐怖の源となっている」（キケロ『占いについて』2: 150）を引いている。

⁴² *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 676-679 ; OC t. 5, p. 55-63.

たため散会するのだが、そもそも「夜話 Soirée」じたい夜への入口に行なわれるものであるから、夜についての評価は『サンクトペテルブルク夜話』という作品そのものの評価と直結するはずである。そうした意味で、メーストルが翻訳中にわざわざ夜について加筆しているのは、注目に値する。

4. メーストルの言語観

ここまで、メーストルによるプルタルコス『神罰が遅れて下されることについて』の翻訳を原典と対照しながら、訳者の独自性を明らかにした。最後に、この翻訳実践から見えるメーストルの言語観について検討したい。

メーストルが、『サンクトペテルブルク夜話』では土爵の口を借りて提起した「神罰が遅れて下される」のは何故かという疑問を抱いたのは、言うまでもなくフランス革命の混乱を目の当たりにしたからである。そして、プルタルコスが同じ主題を扱っており、古代の作品が現代にも通用する、時空を越えた普遍性を持っていると考えたから、翻訳したのだ。

普遍性を持っているのは、時代を問わず共通する内容を書いているからではなく、ギリシャ語で書かれているからである。メーストルがプルタルコスの摂理論を翻訳対象に選んだのは、扱っている主題のためだけでなく、紀元後1世紀のローマ帝政初期かつキリスト教成立期にあって、ギリシャ出身でローマ市民権も持ちつつ生涯の大半は故郷に留まってギリシャ語で執筆したというプルタルコスの特異な立ち位置も、その理由であろう。というのも、メーストルにとってギリシャ語は数ある言語のひとつではない特別な言語だからだ。

『サンクトペテルブルク夜話』第2話で「とくに、何度も強調したように、言語が生まれた無知と未開の時代に遡るほど、より論理的かつ深遠な言葉の形成を見て取れる、また逆に、文明や科学の時代へと下るほどその能力は失われてゆく、この観察に例外はないのです」と述べるとおり、メーストルは古代の言語ほど真理を反映していると考えている。とりわけ「ミネルヴァのごとく生まれ、最初の作品からして絶望させるような傑作であり、たどたどしく喋っていたなどとは証明されたことのない」ギリシャ語は、神の語りの残響であって、「現代の博士に倣って、こうした言語を作るには何世紀かかることか！ などと叫ぶのは、愚かなこと」なのだ⁴³。

⁴³ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 502-503 ; OC t. 4, p. 97-98.

したがって、「言語 *langue* は始まったものです、しかし発話 *parole* は始まったのではない、まして人間とともに始まったのではない。一方よりも他方が先になくなくてはならない、なぜなら発話は〈みことば VERBE〉を通してのみ可能となるからです⁴⁴」というメーストルの考えに倣えば、ギリシャ語の翻訳とは、異なる言語どうしの移し替えではなく、現代語から古代語へ、そして古代語から神の言葉へと遡るための試みであり、「神の正義」あるいは摂理へと近づくには最適の方法である。

しかし、もしメーストルの言うとおり言語の間に序列があって、起源に近い古代語こそ真理を写し取っているのであれば、その解説はともかく、すでに墮落している現代語への翻訳に意義はあるのか。実際、聖書を翻訳し頒布している聖書協会について、メーストルは悪しざまに言う。

聖書協会の驚異的な成功が語られています。何と幼稚な！　すると聖書の翻訳を増やせばキリスト教徒を増やせるのですか？

あなたの助けも、あなたによる防御も

もはや必要な時ではない……

もし俗な言語に翻訳された聖書をことごとく買い占めて焼き捨てる協会が設立されたら、わたしは是非とも参加したくなるでしょう⁴⁵。

『サンクトペテルブルク夜話』第11話の翻訳論でも、やはり聖書協会を認めるかどうかは議論となり、伯爵は「註釈や説明なしに聖書を読んだら聖書は毒です⁴⁶」とカトリックとしては典型的な見解を述べて、最後まで認めることはできないのだった。

問題は聖書の翻訳に留まらない。『神罰が遅れて下されることについて』の序文で、メーストルは翻訳にかなり手こずったことを告白している。

そもそも、古代に遡るほど、諸言語には謎が多い。ギリシャ語だけで、それ以上遡らなくとも、この観察が真実だと証明される。この言語には省略や独特な固有語法が多いため、容易には理解できない。哲学的な話題では、しばしば文章が何だか分からぬ曖昧さを許容し、それを克服するには、根気よく研究して、互いに説明となっている様々な文章どうしを比較せねばならない。もとより各民族には各自の哲学言語があって、別の言語に翻訳するのは全く簡単でない。アリストテレスやプラトンを、優れた手による逐語的なラテン語版で読んだ者

⁴⁴ *Ibid.*, JM p 503 ; OC t. 4, p. 99.

⁴⁵ « Au Prince Korlowski, Saint-Petersbourg, 2 (14) février 1816 », OC t. 13, p. 253. 途中の引用は原文ラテン語で、ウェルギリウス『アエネーイス』2 : 521-522 から。

⁴⁶ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 774 ; OC t. 4, p. 256.

は、哲学者たちを本当の意味で読んでいないのだ⁴⁷。しばしば訳文は原文と同等の難しさを読者に突きつける。原典の意味を十分に理解した者でさえ、自分の理解したことを上手く訳せる表現や語法を自分の言語から探すには長い時間を要するのだ。したがって、ブルタルコスをよりよく理解させる、つまりよりよく味わわせるには、配慮と研究に努めねばならないと、わたしには思われた⁴⁸。

ギリシャ語からラテン語への翻訳すら不完全なのだ。メーストルが後註を多く附していることじたい、訳文のみを読んでも追加説明がなければ理解できないという翻訳の不完全性の証拠である。ギリシャ語が短かく言い表わしていたものを、フランス語に翻訳したら冗長になるのは、古代の言語ほど真理に近く、ギリシャ語よりもフランス語のほうが墮落しているからだ。それを十分に認識していながら、どうしてメーストルはブルタルコスを、つまり帝政ローマ支配下にありながらギリシャ語で書かれた著作を、「よりよく味わわせる」ためにフランス語へ訳そうとしたのか。

メーストルは『サンクトペテルブルク夜話』第2話で、当時のフランス語について、ある逆説を述べている。

まずは普遍言語 *langue universelle* について考えてみましょう。フランス語ほどこの称号に相応しい言語はありません。そして奇妙に思われるのは、フランス語の力はフランス語が不毛になるほど強まっているようであることです。フランス語の全盛期は過ぎ去った。ところが、皆がフランス語を理解し、話しているのです。ヨーロッパに、フランス語を正しく書ける者の数人もいない街があるとは思えません。イギリスに亡命しているフランス人の聖職者たちが、正當にも厚く信頼されているために、フランス語はイギリスにも深く根を下ろしています⁴⁹。

18世紀のフランス語は、フランスという国の墮落を反映して、不毛な言語となっている。にもかかわらず、世界じゅうの言語がフランス語を介して交流している。フランス革命と、世界規模でのフランス語の覇権が、同時に起こっているのだ。こうした言い分に、フランス語こそ最も論理的で優れた言語であるといった類の中心主義は感じられない。サルデーニャ王国の臣民であるメーストルにとって、フランス語は母語だが、フランスは母国ではないのだ。翻訳言語としてフランス語を選択するのは、それが有用だからである。

⁴⁷ ここに原註で、プラトンやアリストテレスのラテン語訳を信じてはならないと述べる、ラルフ・カドワースからの引用が附されている。

⁴⁸ OC t. 5, p. 371-372.

⁴⁹ *Soirées de Saint-Petersbourg*, JM p 516 ; OC t. 4, p. 125.

さらに言えば、既にアミヨの仏訳があるにもかかわらず、より時代の下った現代フランス語で訳し直すことで、多くの読者に開くことができる。始源から離れるほど裾野が広がるのだ。この逆説は、単一性と普遍性、「変化して、しかし同じものとして⁵⁰」という、メーストルが真理を求める両義的な性格を、よく表わしている。

結論

以上、メーストルによるブルタルコス『神罰が遅れて下されることについて』の翻訳を検討した。形式面では、メーストルが骨を折って対話形式を改変していることは、かえって『サンクトペテルブルク夜話』が対話形式になっている特異性を浮かび上がらせる。内容面では、その『サンクトペテルブルク夜話』でも語られるメーストルの考えが訳文中に何箇所か盛り込まれており、きわめて禁欲的な翻訳態度にもかかわらず、この翻訳がメーストルの他著作と呼応し合っているのが分かる。翻訳という営為そのものについて言えば、始源の言語から離れており真理を表わすのが難しくなっているはずの現代語で、あえて新訳によって古典を開かれたものにしようと試みるメーストルの逆説的な態度が、秩序の解体と再構築という自身の歴史観の実践となっている。

翻訳は、それ自体が独立した著作と看做せるのか定かでなく、訳者の意図を反映しているとも限らないため、作家研究において翻訳実践や翻訳作品の占める位置は大きくない。しかし、何を翻訳するかという選択も、どのように翻訳するかという手法も、訳者の価値観を表わしている。少なくともメーストルについて言えば、ブルタルコス『神罰が遅れて下されることについて』の翻訳は、多言語を行き来しながら真理を探究しようとするメーストルの思索において、重要なものである。

⁵⁰ *Considérations sur la France*, JM p. 276 ; OC t. 1, p. 158.

附録（資料翻訳）：ジョゼフ・ド・メーストルと東洋言語

メーストルの他言語への関心は晩年まで尽きなかった。それは漢字文化圏にも及び、表音文字でも表意文字でもある漢字に興味を持って、普遍言語の手掛かりを探そうとしている。メーストルと東洋言語について包括的に検討するのは今後の課題としたいが⁵¹、つい先日、畑浩一郎氏が、メーストルに宛てたヤン・ポトツキの手紙から両者の漢字への関心を明らかにしてくれたので⁵²、メーストルの側から関連する箇所を以下にふたつ挙げる。いずれも手紙からの抜粋である。

引用 1⁵³

発明者から発明へ話を移すと⁵⁴、この汎用文字 *pasigraphie* がわたしに抱かせる多大な興味は、言葉にできません。この方法の確実性と普遍的な用途を認めるならば、印刷術、羅針盤、振り時計、消防ポンプ、つまりは工学の分野で最も偉大なものの全てを凌駕します。—— わたしは心の底から言います、それが幸福に成功しますように！

わたしは 20 年前、少なくとも一般的な意味において、シャノワネス・ド・ポ

⁵¹ メーストルと東洋思想については Jacques Marx, « Les sources orientales de Joseph de Maistre » dans *Bulletin de l'Association Guillaume Budé*, 1970, p. 563-600 という先行研究があるが、これは『サントペテルブルク夜話』や『教皇論』などでマヌ法典を参照していることについて主に論じている。

⁵² 「ヤン・ポトツキと東洋言語 —— ジョゼフ・ド・メーストル宛の書簡をめぐって ——」、『聖心女子大学論叢』第 141 集、2023 年 6 月、159-172 頁。なおメーストルからポトツキ宛の手紙は、全集の第 8 巻 99-125 頁に 1807 年 11 月付のものと 1810 年 6 月 5 (17) 日付のものをつなげた *Lettres à M. le Comte Jean Potocki : quelques mots sur la chronologie biblique* として計 2 通、第 12 巻 457-462 頁に 1814 年 10 月 16 (28) 日付のものが 1 通ある。全体的な筆致を見るに、メーストルは友情を強調しつつもポトツキの歴史観にはあまり賛同できなかったようである。もっとも 1814 年の手紙には見解の相違を「学問とは各々が料理を持ち寄る大きなピクニックです。どの料理も美味しいものにする、これが全員にとっての義務です。けれども、参加者の誰もが全ての料理を作れということではありません。卵を持っている者がオムレツを作るのです」（OC t. 12, p. 457）と、やや冗談めかした記述も見られる。

⁵³ « À M. Dumont, Bachelier en droit, à Cluses, province de Faucigny, en Savoie. Turin, 3 janvier 1818. », OC t. 14, p. 120-121.

⁵⁴ この前に、メミュー氏 (Joseph de Maimieux (1753-1820)) とは 20 年ほど音信不通だったのに今も自分のことを覚えていてくれて嬉しい、と書いている。メミューは 1797 年に著書『汎用文字、あるいは翻訳なしに他の言語で読んだり聞いたりできるようひとつの言語で書いたり印刷したりする新しい技 = 術の基本的諸要素 *Pasigraphie, ou premiers éléments du nouvel art-science d'écrire ou imprimer en une langue de manière à être lu et entendu dans toute autre langue sans traduction*』で独自の汎用文字を提唱した。

リエ⁵⁵に渡した覚書で、こう書きました。「わたしは汎用文字と漢字の何が違うのか知りたい、というのも、人間はどのような方法を探っても概念と音のどちらかしか表わせないからである。前者の場合、中国語を話すことになる。なぜなら、衆知のとおり、中国人、日本人、韓国人、コーチシナ人（おそらく他にも）が中国語の本を読むとき、それぞれの言語で読み、互いに全く理解し合わないからだ。それこそまさに汎用文字である」

ついでに尋ねたいのは「汎用文字は類義語を避けられるのか、できるとしたらどのようにしてか」ということです。たとえば、彼は深淵 *gouffre* に落ちた、というフランス語の文章をあなたが汎用文字にしたとき、彼は奈落 *abîme* に落ちた、とわたしが読まないようにするには、どうしたらよいのでしょうか？

中国語でも、書き言葉を話し言葉に翻訳する難しさは同じです。そこでわたしはサンクトペテルブルクで、皇帝の通訳たちに中国語を勧めました。しかし彼らは、わたしとの唯一の共通言語であるラテン語をほとんど解さなかったのので、わたしに満足に応じられませんでした。

メミュー士爵が、シャノワネス宛の手紙で、話ついでに、また詳しい説明もなく、汎用文字は中国語では全くない、と書いていたのを覚えています。

その瞬間、雷が落ちたのです。わたしは去りました。旋風はわたしをピエモンテ、ヴェネツィア、トスカーナ、サルデーニャ、そして最後にロシアへと運び、わたしは変わらぬ無知と好奇心を抱いたままロシアから帰ってきました。この点についてわたしの考えを述べたら、完全に手紙の枠を越えてしまいます。だからわたしは、あなたがこの発明の重要な一部分となったのを祝福するに留めます、それが採用されたらたちまち他の全てを追い抜くはずであり、今からでも発明者の優れた慧眼に最大の名誉をもたらすでしょう。

引用 2⁵⁶

1月16日付の興味深いお手紙にもっと早く返信しなかったのは、わたしの時間がほとんど儘ならなかったから、それと、この種のことを判断するに相応しい科学アカデミーの認識を知りたかったからです。本当に残念ですが、ここであなたは何の擁護もされないでしょうし、とくにアカデミーがあなたに好意的であるとは思えません。最近もまた、アンクティル氏の浩瀚で特異な著作（『ウパニシャッド』、インドの哲学）を読んでいたとき、この新たな奥義をひどく手荒に攻撃する文章に出くわしました。前にもお話ししたとおり、わたしは誤解なく知りたいと切望する者のひとりです。しかし、待っている間もわたしの疑念は相変わらず強く、わたしはいつも漢字に戻るのです。わたしが 8 万文字もある言語と 12 文字しかない汎用文字を比べていると、あなたは驚かれるでし

⁵⁵ Marie-Elisabeth Polier (1742-1817)のこと。

⁵⁶ « À M. Dumont, Bachelier en droit, à Cluses, province de Faucigny, en Savoie. Turin, 27 février 1818. », OC t. 14, p. 126-127.

ようが、わたしのほうも、この驚異的な中国語をあなたが認識する方法に驚いているのです。「(信頼できる著者から引用します⁵⁷) それは3つの記号しか持っていない。直線と曲線と点だ。それぞれが異なる配置で、多かれ少なかれ繰り返されるが、けっして目を惑わせない。これら3種類の筆のさまざまな組み合わせが、中国語の214の基本的な記号⁵⁸、つまり中国語の要素を形成している。これらの要素はそれぞれ、単純な、あるいは一般的な、より共通の概念に対応している。そうした要素が互いに組み合わさって、6万字とか8万字とかいった漢字を作り、中国語の書き言葉を構成している。この214の基本的な記号は鍵とか根とか呼ばれ、辞書では214の異なる区分や種類となって、どれを主要な要素としているかによって漢字が整理されている、云々」

あなたの「覧表」というのが、中国語の区分や種類でないとしたら、何であろうでしょう？ 中国語の言葉は1500語しかなく、全て単音節ですから、各々の単語が40や50の意味を持っているはずです。しかし、そのうち15か20も知っていれば、すでに大多数の本を読めるのです。

中国人は、概念ではなく音を表わしたいと思うのでしょうか(たとえば固有名詞は)？ 中国人は中国語から必要な音を探し、音として受け取るよう傍線を引いて知らせます。たとえば中国語で、**du** という単音節が火薬を、もうひとつ **mont** という単音節が大砲を意味するとします⁵⁹。もし **du_{mont}** と書けば⁶⁰、**Dumont** と読め、大砲の中の火薬とは読まず、固有名詞だと分かるのです。中国人は、提示された名前の音を伝える音を中国語の1500の単音節から見つけられなければ、それを書けません。したがって、わたしの名前は中国人にはマシテリ⁶¹と書かれるようになりました。

今わたしの目の前には、アミオ神父がフランス語に、ジョーンズ卿が英語に翻訳した中国語の頌歌があります。それらには言語による差異がありますが、概念を表わす言語のどれであっても、正確であることは不可能だからです。あなたはわたしに人間の視覚言語について語ります。申し訳ありませんが、わたしには理解できません。あなたの文字のそれぞれに名前があって、中国語のように、それらの名前は組み合わせられると別のものになるとして、それは別の話です。たとえば、あなたが奈落 **abîme** と書いて、わたしが絶壁 **précipice** と読まないようにできるのは、分かります。違った仕方では、わたしには形而上学的に

⁵⁷ 出典不明。『サンクトペテルブルク夜話』第2話で伯爵がサンクトペテルブルクで読んだと言っているバイエルの漢羅辞典(Theophilus Siegfried Bayer, *Museum Sinicum*, 1730)かと推測したが、該当する箇所は見つけれなかった。

⁵⁸ 部首のこと。中国では『字彙』(1615)以降、漢字は214部首とされており、それと数が一致している。

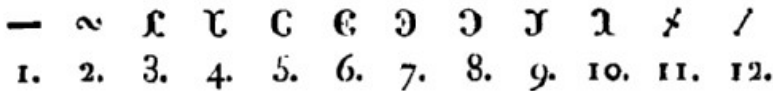
⁵⁹ 何らかの漢字を念頭に置いているのか、単に相手の名前 **Dumont** を音節ごとに分けて架空の意味を振っているのか不明。

⁶⁰ 縦書きの中国語で、固有名詞の左側に傍線を引く「専名號」を真似ている。

⁶¹ 原文では **MASSITELI** と綴られている。畑氏の前掲論文によれば、1805年にポツキがメーストルへ宛てた最初の手紙で「瑪 **Ma** 西 **si** 特 **te** 立 **li**」という音訳を示しており、それと一致している(ただし濁らないよう **s** を重ねている)。

不可能に思えます。あなたの趣意書でも手紙でも、あなたの文字に名前があるかどうか分かりません。あなたはそれらを発音するのですか、それとも目のためだけですか？ 中国語のように、ピ *pi* の記号、フォ *fo* の記号、何々の記号、と言えますか？ わたしは果断な実験がとても好きです。ひとりの汎用言語使用者に 40 語か 50 語を書き取らせ、同じものをもうひとりの汎用言語使用者に、別々に書き取らせてみたい。それからわたしは、汎用言語で書かれた文章ふたつを交換させ、ひとりずつ、別々に読み上げさせたい。もし彼らが同じ言葉を読み上げたら、その発明の現実性という問題は解決します。—— しかし注意してください、実用性についてはまだ分かりません。わたしが忙しければ証明するのは簡単なのでしょうが。—— ともかく、これらの難癖は皆、強い関心を持ち、思い違いであってほしいと心から願う人間によるものです。わたしはメミュー公爵の知性と慧眼、そして長年に亘って彼の素晴らしい作品の発見と完成に傾注してきた粘り強い忍耐力（偉大な成功の唯一の母です）に最大の敬意を払います。彼の才能に対するあらゆる感情に加えて、わたしの公刊した幾つかの小論に彼が関心を寄せてくれたことへの然るべき感謝の念もあります。

メミューの汎用文字は、下図の 12 の形を組み合わせで表記される⁶²。



この汎用文字 *pasigraphie* から話を始めているため、ここではメーストルは、漢字が事物や概念を形象化したシンボルやエンブレムのようなものであるという側面（象形や指事による「文」）よりも、要素の組み合わせで作られるという側面（形声や会意による「字」）に着目しているようである。

中国語や漢字に対して（メーストルは両者をはっきりと書き分けてはいない）、あるいはメミューの提唱する汎用文字に対してメーストルの期待する機能は、本論で見たような、真理を表わしている言語ではないが翻訳のための言語としては最も使い勝手のよい、舌足らずの共通語としてのフランス語に求めている役割と、大きく違わないように思われる。ただ、漢字文化圏でないのに漢字を共通言語としたり、人工的な汎用文字を導入したりして、上手く通用するのだろうか。また、アジア人どうしが漢字で筆談するような発話なしの言語は、メーストルの考える「みことば *Verbe* → 発話 *parole* → 言語 *langue*」という図式による言語の成立と、どう対応するのか。書簡ゆえに大胆な仮説を披露したのかもしれないが、メーストルの思想からは信じがたい奇妙なこだわりである。

⁶² Maimieux, *op. cit.*, p. 2.